

## 北里大学病院における新生児外科疾患出生前診断

(分担研究：新生児外科的疾患に関する総合的研究)

根本荘一，植野信水，野田芳人，島田信宏

**要約：**最近3年間の院内出生例4688例のうち、14例(0.3%)が新生児期に外科的治療の対象となり、うち5例は出生前に診断、または疑いをもち、外科的治療を行なった。一方、院外出生例での外科疾患は26例であったが、出生前診断がついた症例は1例もなかった。産科において外科疾患をより正確に出生前診断することにより、嚴重な胎児管理と至適分娩時期、分娩様式の選択とともに、小児科、小児外科チームへの情報提供を行なえ、児の予後を改善していくことが可能と考える。

**見出し語：**新生児外科疾患，出生前診断，超音波断層法

北里大学病院における新生児外科的疾患の出生前診断の現状についてご報告する。当院における1986年1月1日から1988年12月31日までの3年間の総出産数は、4688例であり、その内、外科的治療の対象となった症例は、14例(0.3%)であった。また、他院で出生し当院NICUへ新生児搬送された症例のうち、外科的治療が必要となった症例は26例であった。

当科の産科外来では、全妊娠期間を通じて胎児発育のスクリーニングの目的で妊娠初期(8~11週)、中期(18~22週)、後期(33~36週)の3回の超音波検査を施行している。胎児発育の異常、羊水量の異常、胎児奇形の疑われる症例に

は、経時的にフォローアップを行なっている。

院内出生例では、外科疾患の出生前診断率(表1)は14例中5例(35.7%)であったが、1988年に限ると5例中3例(60%)と診断率の向上がみられている。一方、院外出生例では、施設間で差はあるものの平均で3.1回の超音波検査がスクリーニングの目的で行われているが、何らかの異常を認め、出生前診断のついた症例は一例もなかった。超音波検査で診断の困難な疾患はあるものの、現在のように超音波機器の普及した状態でも経験豊富な検者が必要と思われた。

当院で経験した新生児外科疾患(表2)は、鎖肛が12例と最も多く、次いで横隔膜ヘルニアと

小腸閉鎖，狭窄が5例ずつ，十二指腸閉鎖・狭窄，ヒルシュスプルング病，腸回転異常症，食道閉鎖，および臍帯ヘルニアがそれぞれ3例ずつあった。院内出生の症例のうち，十二指腸閉鎖で先天性心疾患を伴っていたダウン症の1例，多発奇形を伴っていた食道閉鎖の2例と同様に多発奇形を伴っていた横隔膜ヘルニアの1例は，残念ながら新生児死亡したが，他の症例は出生後外科的治療により，救命できた。次に症例を呈示する。

#### 症例1

44歳，0経妊0経産の主婦で妊娠29週の時点より胎児腹部に腫瘤像を認め，妊娠34週他院より当科に母体搬送された。当科での超音波検査の結果，臍帯ヘルニアと診断し，出生後の外科的治療を考慮し，妊娠正常まで継続を計り，妊娠39週帝王切開術にて児を娩出させた。しかし，気管狭窄，肺低形成等の合併奇形のため，残念ながら日令0日死亡した。

#### 症例2

33歳0経妊0経産で妊娠後期のスクリーニングの超音波検査で，羊水過多を認め，当科に母体搬送された。羊水過多，腸管の拡張像を認め，下部消化管閉塞を強く疑った。妊娠38週の時点の超音波断層像では，羊水過多と拡張した腸管を認めてた。この症例は，妊娠38週帝王切開にて分娩し，日令0日で手術を行い，計7ヵ所に及ぶ小腸閉鎖であった。

#### 症例3

30歳，0経妊0経産で，妊娠40週他院より臍帯ヘルニアまたは腹壁破裂の疑いにて当科に母体搬送された症例で，超音波断層像で，胎児軀幹よりの肝臓，腸管の脱出が認められ，同様の出生

前診断をし，小児外科チーム待機のうえ帝王切開術を施行した。しかし，胸郭形成不全等の合併奇形のため，救命できなかった。

以上，症例を交え，北里大学病院における新生児外科疾患の出生前診断の現状についてご報告致した。産科サイドにおいて外科疾患の出生前診断は，適切な分娩時期，分娩様式を選択することともに，出生後の速やかな外科的治療のために必要不可欠なことと思われる。また，小児科，小児外科スタッフへ，より多くの胎児情報の提供が行なえ，児の予後改善の目的からも胎内診断は重要なことと考える。当院における出生前診断率も徐々に向上してきているが，今後，日常化した超音波断層法によるスクリーニング検査の精度を向上させることにより，一層正確な胎内診断を行ない，小児科，新生児外科との関係により，児の予後を改善していきたいと考える。

出生前診断率

院内出生例 5 / 14 ( 35.7 % )

( 1988 ) 3 / 5 ( 60.0 % )

院外出生例 0 / 26 ( 0 % )

表 1

新生児外科疾患 ( 1986 ~ 1988 )

鎖 肛	12 例 ( 3 )
横隔膜ヘルニア	5 ( 3 )
小腸閉鎖 ( 狭窄 )	5 ( 2 )
十二指腸閉鎖 ( 狭窄 )	3 ( 2 )
ヒルシュスプルング病	3 ( 0 )
腸回転異常症	3 ( 0 )
食 道 閉 鎖	3 ( 1 )
臍 帯 ヘルニア	3 ( 1 )
仙 尾 部 奇 形 腫	1 ( 1 )
卵 巢 囊 腫	1 ( 1 )
頸 部 囊 胞	1 ( 0 )

( ) 院内出生例

表 2



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:最近3年間の院内出生例4688例のうち,14例(0.3%)が新生児期に外科的治療の対象となり,うち5例は出生前に診断,または疑いを持ち,外科的治療を行なった。一方,院外出生例での外科疾患は26例であったが,出生前診断がついた症例は1例もなかった。産科において外科疾患をより正確に出生前診断することにより,嚴重な胎児管理と至適分娩時期,分娩様式の選択とともに,小児科,小児外科チームへの情報提供を行なえ,児の予後を改善していくことが可能と考える。